Small-Urban-Spaces の形態と形成要因

FORM AND FORMATIVE FACTOR OF SMALL-URBAN-SPACES

近江 隆*, 北原 啓司**
Takashi OMI and Keiji KITAHARA

We study on SUS (Small-Urban-Spaces), included in private building plots on central shopping area, as intermediate territory in city.

First, we classify SUS from scale and plan, and we make clear that a rate of depth to frontage of SUS is an available index pointing out street character.

Secondly, we analyze a background of formation of SUS, ownership of land and building, completion year and type of business.

And we explicate that these factor influence on not only scale and form of SUS, but also permeability of facade and arrangement of street furniture.

Keywords : *Small-Urban-Spaces, shopping mall, setback, open space*

スモールアーバンスペース, ショッピングモール, 壁面後退, 空地

1. 「SUS」の定義と研究の目的 (SUSの定義)

Small-Urban-Spaces (以後は「SUS」と略称) は既に同名の著書^{注1)}で W. N. Seymour によって用いられている。同書において用いられた Small Urban Spaces は、アメリカの Paley Park を代表例とする「Vest-Pocket Park」を指しており、小公園やプレイグラウンドが対象となっている。これに近いものとして広場やモールがある。

一方、W. H. Whyte による著書^{注2)}においては、小公園と言うよりも、街路に面した個々の建物の敷地前面で展開される様々な行為と空間形態との関係について述べられており、前者とは異なる Small Urban Spaces の定義となっている。

我々がここで扱う「SUS」は、W. N. Seymour らによる公園・街路・広場といった「公共的な空間」とは異なり、W. H. Whyte や、また J. Gehl が屋外空間の生活とデザインに関する研究^{注3)}で対象としているような都市の中にある商店や事務所ビル等「私的な建物および敷地内にあるオープンスペース」を指すものである。公園系の空間が、一応私的な建物とは独立して設置されるのに対し、SUS は私的な建物の建設とともに生み出された私的空間である。しかし、敷地内の非建蔽地がすべ

て SUS になるわけではなく、それが不特定多数の人々に利用されるよう開放されていることが要件となる。

すなわち、SUS とは、私的建物敷地内において建物まわりや敷地内に貫入するオープンスペースで、不特定多数の利用に供される空間である。したがって、一階部分の入り口まわりのセットバックやピロティ、制度上の公開空地、建物内に引き込まれた開放された遊歩廊等も含まれる。

地図上の街路をみると、大部分の街路は2本の直線または滑らかな曲線によって描かれている。マクロ的に見れば、街路と建物敷地との接合面、すなわち公的領域と私的領域との接点は、このような直線的な面としてとらえられることとなる。

しかし、法的な所有領域の境界が直線的であるとしても、実際の SUS と街路を一体的に描くと、そこには図一1にも示されているような大小様々な凹凸が連続してみられるのである。それが意識的にか無意識的か、計画的か非計画的か、デザインされているかいないかにかかわらず、SUS は多くの建物敷地で存在するのである。街路景観の豊かさや街路の賑わいは、この街路と SUS との相互作用によってもたらされるものといっても過言ではない。

以下に、本研究の今後の一連の報告に共通する基本的

* 東北大学工学部建築学科 助教授・工博

** 東北大学工学部建築学科 助手・工修

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Univ. of Tohoku, Dr. Eng.

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Univ. of Tohoku, M. Eng.

図—1 SUS の分布状況 1/1 500 (仙台市大町商店街, 1989 年 9 月)

考え方を述べる。

(SUS と街路の相互作用)

法的に明確に区分される官民境界とは独立に、SUS の側では、そこが不特定多数に利用されるという点で、私的領域のセミ・パブリック化 (SPu 化)^(註4) と呼べる現象が生じる。一方、SUS は街路の流れから身を隠しながら街路上の人の流れを観察できるという点で、人待ち場所として商店の利用とは無関係に利用されることとなる。人待ち・休息・談話・催物・見物といった、いわば公的領域の行為を私的領域へ誘引する働きを、ここでは「人の行為からみた SUS の SPu 化」と定義する。

他方、こうした誘引を意図的に考案した SUS の演出 (デザイン) もある。公道上の街路樹とは別に、敷地内に植えられた樹木は、ある時にはシンボルとなり、時には歩行者へ安らぎの気分を与え、街並景観の重要な要素としても機能し、また SUS 内に置かれたベンチ等のファニチュアや噴水等の装置は、私的な商業活動の意図が背後にあるとは言え、「私的領域の外部化」、すなわち、外部の不特定多数への利便の提供や街並景観の整備といった集合的・公的要求への意図的連帯を示すものといえる。これは人の行為からの SPu 化とは位相の異なる「ものや空間の側がもつ SPu 化」の表れと言えよう。

公私空間の相互作用と言う以上、もう一方の側にセミ・プライベート化 (SPr 化) という概念が成立するであろう。ここでは SPr 化を、道路や空地などの公共的空間に物を置いたり、自ら手を加えたり、あるいは何らかの行為を行うなどの「公的領域の内部化」と定義する。商店街で考えれば、商品陳列台や看板を道路上に並べて利用したり、店の人間が客を呼び込むために道路上で客引きをする等のことである。一般にこれらの行為は公の私物化として批判的に考えられがちだが、ヨーロッパのカフェやブラスリーのように、それが日常化し街路の風景となっている場合もある。近年、我が国においても街路における多様な行為やイベントの受容が進行し、街路空間の SPr 化の許容範囲が広がりがつつある。

しかし、上記の例にあるような一方的な SPr 化は我々にとっての当面の対象ではない。問題は、SPu 化と SPr 化との相互作用である。すなわち、SUS によって

SPu 化を受容することが同時に、公的領域としての街路や広場等における SPr 化の可能性をより深めること、それ故に SUS 設置者側に反対給付としてのメリットが与えられることである。これは SPu 化と SPr 化の交換関係の成立ととらえても差し支えない。

このような交換関係の成立によって、SUS の前面には、SUS 設置者側の単なる「公的領域の内部化」といった次元を超えた様々な都市的アクティビティが誘引され、人をそこに集結させ、固着させる空間領域が形成されるはずである。こうした現象をここでは「SUS 領域の外延化」と呼び、そうした働きを「SUS 効果」と定義する。「SUS 効果」は、街路における賑わい、興奮、界限性、レスト、コミュニケーションといった都市の様相の形成と不可分の関係を有すると言えよう。こうした意味において、SUS は街路の人間化という主題にとっても、ヨーロッパの広場とは異なる街路型の都市コミュニティ空間の形成の主要な要素としての位置を占めると言えよう。

本研究は、こうした SUS と街路の歩行者とが作り出す空間パターン (領域性とその意味・役割) に着目し、私的領域としての SUS が独自にもつ意味と、公的領域との相互作用の上に形成される機能の誘引・発生、新しい領域の形成を明らかにすることで、外部空間に対する設計・計画の基礎を与えようとするものである。

2. 課題と方法

本研究の課題の中心は、都市の中心的街路において、SUS が有する意味・働きを解明することであるが、それは大きく 4 つの柱からなる。

第一は、SUS の景観論的解明で、SUS が歩行者の視覚に与える効果の分析である。この面の研究としては、船越・積田^(註5)および小嶋^(註6)、奥^(註7)らの景観心理的研究がある。前二者は街路空間の物理量と心理構造の解明を重回帰分析法を用いて行うもので、特に船越・積田論文においては、我々が対象とするような街路に面する建築物の壁面線の凹凸を、〈ふくらみスペース〉という言葉で表現し分析されているが、写真撮影されたひとまとまりの街路上に存在する〈ふくらみスペース〉を単位長さ

当たりに平均した値を変量として使用しており、個々のSUSの大小と心理量との相関は論じられていない。奥論文においては瞬間視実験を行うことで、街路景観構成要素が視覚分化していく過程が論じられているが、ここでもやはり、個々の凹凸を中心課題としているわけではない。

また、建築の外部空間の構成と知覚構造との関係性に関する研究としては、宮本・谷口^{注8)}および志水・谷口^{注9)}らの一連の報告があり、前者では囲み空間に焦点が当てられ、また後者においては、ファサード形態と評価構造との分析の中で、我々が定義するSUSをファサードの凹凸性という言葉で表し、出入口の場所等を含めて詳細に分析されているが、前者は大学キャンパス、また後者は銀行建築に対象を限定したものとなっている。

一方、八木・乾^{注10)}による模型を用いた実験心理学的研究は、我々の今後の研究の展開において手法的に大変参考となるものである。

第二の柱は、アレグザンダーやゲールらのいう「エッジ効果」^{注11)}や「ソフトエッジ」^{注12)}に通ずる行動心理学的分析である。この研究は滞留行動に代表され、広く人々の居心地やコミュニケーション等に果たす役割を指摘している。一方、我が国ではこの面の研究は乏しく、対象が広場、公園、公開空地に限定され、また現象記述にとどまっている^{注13), 14)}。

第三の柱は、SUSを領域論的に対象化するものである。既に、鈴木・小林らの研究^{注15), 16)}に代表される共有領域の形成という観点からの生活領域研究がある。この研究は、住戸の内と外との関係を中心に住戸まわり空間を分析するもので、いずれも集合住宅を含む住宅地系の研究であり、商業地区における領域論的展開を図った研究はほとんど見受けられない。

第四の柱は、SUSと街路評価の関係分析である。全国的にショッピングモールの建設が進行している状況からすると、その魅力や効果を分析したものは少ないと言える^{注17), 18)}。モール化がそれ自体として街路の魅力や活性化を生み出すのではなく、街路と建築の関係がモール化によってどのように変化し、空間的魅力を作り出して行くのかといった街路の成熟過程が解明され、そのことによってモール化の意味が検証される必要がある。

本研究はこれらのうち、第一、二の柱を今後の研究課題とし、第三、四の柱を中心に研究を進めてきた。具体的には以下に示す4つの課題を設定した。

[課題1] SUSの空間形態分析

SUSの規模の差は、そこに誘引される行為の量・質に自ずと差を生じさせるものであると考えられ、それはSPu化・SPr化の深度の差となって表れるはずである。ここでは、SUSの特性を示す指標として、奥行きと接道幅(間口)を考える。

また、SUSの空間形態の把握手段として、各店舗前面の平面形を記録すると同時に、SUSの空間構成要素(壁面・エントランス・ファニチュア・看板・アーケードの柱等)の観察を行い、これらのデータから、空間形態によるSUSの類型化を行う。

[課題2] SUSの成立背景の分析

SUSの空間形態および利用のされ方に大きく影響を与えるものとして、SUSを有する建物に関する要素(土地所有関係・建物所有関係・業種・竣工年度等)が挙げられる。これらのいわばSUS成立の背景とも言うべき要素を調査し、相互の関連およびSUSの空間形態に及ぼす影響を分析するものとする。

[課題3] SUS内外の行為分析と領域形成

SUSの内部および前面道路上、すなわちSUS内外における人々の行動の種類および位置、行為者の属性、行為に関与したもの(要素)、および動線を一定時間内にトポロジカルな関係として地図上に記録し、この行動観察マップの分析から、SPu化・SPr化の実態を分析するとともに、SUS規模の拡大に伴う、SUS領域の外延化あるいはSUS効果とも呼ぶべき現象を明らかにする。

[課題4] SUSからみた街路(モール)の評価

上記の課題を街路単位に比較考察することによって、街路整備(モール化)がそれ自体として独立にあるのではなく、建物の更新・建設等と関連しながら街路の表層の変化(エッジのソフト化、街路と建築の応答関係)を作り出していることを解明する。つまり、SUSの形成状態を通して街路(モール)の空間評価を行うという新しい視座の形成へつなげたい。

本報告は上記課題の1および2を扱ったものである。

3. 調査対象および調査方法

調査対象は、仙台市、横浜市、吉祥寺市、旭川市の各々の商店街で、その調査時期、目的、調査項目等は表-1に示すとおりである。

各調査においては、最初に、各店舗前面の平面形、またSUS内および街路上のファニチュア・植栽等の配置を実測調査し、行動観察用のマップを作成した。

なお、本報告は、仙台市における調査結果(調査No.1, 2, 6, 7)をもとに分析したものである。また、SUS内外における人々の行為分析とSUS領域の形成に関しては、横浜市および吉祥寺市における調査結果を加え分析しており、続報で詳細に報告することとなる^{文1)~文6)}。

また、調査対象となった仙台の6商店街の特徴は表-2の通りである。

表—1 調査対象および調査時期

対象地域	街路名	調査時期	調査目的	調査項目	調査No
仙台市	大町	1986.10.2-10.16	SUS内外の行動観察 観察マップ作成、SUSの定義	行為の種類、位置、動き、行為者の属性 SUSの形状、SUS内外の緑の位置	1
仙台市	一番町四丁目・一番町一番街 サンモール・大町・名掛丁 中央二丁目	1987.9.27-10.21	SUSの形態による類型化 SUS内外の行動観察	行為の種類、位置、動き、行為者の属性 SUSの形状、SUS内外の緑の位置	2
横浜市	元町・馬車道・伊勢佐木モル	1988.7.15-7.17	本調査対象街路の抽出	SUSの分布状況、行為の頻度・種類	3
東京都	吉祥寺サウナ・池袋サンシャイン通り 赤坂一ツ木通り・渋谷センター街 歌舞伎町セントラルロード	1988.7.17-7.19	本調査対象街路の抽出	SUSの分布状況、行為の頻度・種類	4
横浜市 東京都	元町・馬車道・伊勢佐木モル 吉祥寺サウナ	1988.10.3-10.7	SUSの形態による類型化 SUS内外の行動観察	行為の種類、位置、動き、行為者の属性 SUSの形状、SUS内外の緑の位置	5
仙台市	一番町四丁目・一番町一番街 サンモール・大町・名掛丁 中央二丁目	1989.7.27-8.3	SUSの成立背景の解明	敷地規模、延床面積、各階別床面積 土地所有・建物所有関係、竣工年度 (法務局登記簿閲覧調査)	6
仙台市	一番町四丁目・一番町一番街 サンモール・大町・名掛丁 中央二丁目	1989.8.23-9.2	SUSの成立背景の解明	SUSの形状(平面構成・断面形状) ファサード・エントランス形状 建物使用者の業種構成	7
旭川市	平和通り買物公園	1989.11.30-12.2	SUSの成立背景の解明	敷地規模、延床面積、各階別床面積 土地所有・建物所有関係、竣工年度 (法務局登記簿閲覧調査)	8
旭川市	平和通り買物公園	1989.12.11-12.15	SUSの成立背景の解明	SUSの形状(平面構成・断面形状) ファサード・エントランス形状 建物使用者の業種構成	9

表—2 調査対象街路の概要

一番町	一番町四丁目	一番町一番街	サンモール
長さ・幅 377m × 15m	200m × 15m	200m × 15m	240m × 15m
天蓋形態 一部(ト型透明)	一部	一部	全蓋(可動)
幅3.85、高さ5.5	幅4.4	幅4.4	幅15、高さ13.7
路面 レガタイル	レガタイル	レガタイル	磁器タイル
ファニチュア 天然石(緊急車)	天然石(緊急車)	天然石(緊急車)	天然石(緊急車)
ベンチ・肩入れ	ベンチ・肩入れ	ベンチ・肩入れ	ベンチ・肩入れ
電話BOX・街路灯	電話BOX・街路灯	電話BOX・街路灯	電話BOX・街路灯
水飲場・噴水灯	水飲場・時計灯	水飲場・時計灯	水飲場
街路樹 常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 27 落葉樹 40
備考 57.10 モール化	57.10 モール化	57.10 モール化	61.11 モール化 タイル舗装埋蔵
中央通り	大町	中央二丁目	名掛丁
長さ・幅 200m × 11m	270m × 11m	200m × 11m	200m × 11m
天蓋形態 全蓋	全蓋	全蓋	全蓋(開閉)
路面 ガタタタ大理石	イト産赤シタ	カー舗装	カー舗装
ファニチュア カクリ人形 6基	なし	なし	なし
街路樹 常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 24 落葉樹 40	常緑樹 27 落葉樹 40
備考 52.7 アーケード改築 62.12 マーブロード	52.7 アーケード改築 旧町名碑埋込み	52.7 アーケード改築 旧町名碑埋込み	40.3 アーケード完成 50.6 カー舗装 63.7 ガス燈設置

図—2 一番町四丁目

図—3 一番町一番街

図—4 サンモール

図—5 大町

4. SUSの規模および[奥行き/間口]の構成

仙台市の6商店街における個々のSUSにおいて、道路境界から店舗入口までの距離(不整形のSUSの場合は最大距離と最小距離との平均値)をSUSの奥行き、SUSが前面道路と接する距離をSUSの間口と定義し、各街路別にXY座標上に両者を表現して、街路ごとに平均値を付記したものが図—2～図—7である。なお、同じ建物で複数のSUSをもつ場合は独立したSUSとみなし、またSUSをもたない建物についても、奥行き0m・間口0mの一つのSUSとして抽出することにより、サンプル数は、336となった。

なお、SUSは商店街の建物更新等に伴って、刻一刻変化している。本稿の分析は調査No.6および7の時点での街路およびSUSの形状を基本としている。

仙台的6商店街全体でのSUSの平均間口(0mを除く)は約5.7m、奥行きは1.7mであり、奥行き2.0m

図—6 中央2丁目

図—7 名掛丁

未満の狭小なSUSが全体の85%を占めているのが特徴的である。街路別には、モール化あるいは、路面の改装事業に呼応する形で建物の更新が近年活発化している大町・一番町四丁目で[奥行き/間口]の比率は大きくなっており、モール化はもっとも最近でありながら建物の更新がほとんどなされていないサンモールでは、奥行

とにより、SUS からみた街路全体の開放度を示すことになる。

奥行き、間口とも6商店街の中では最も大きい大町において3.0mと最も高い値となっており、特に中規模以上のSUSがその60%以上に寄与していることがわかる。また、飛び抜けて規模の大きいSUSをもつために、平均規模が比較的大きくなっている一番町一番街で、ポケット型に代表される小規模SUSが連続するサンモールに比べて開放度が低くなっており、街路の特性を表す上で有効な指標となるものと考えられる。

6. SUSの成立背景

前節では、SUSの空間形態が街路によって大きく異なることが明らかとなったが、それは言い換えれば、SUSを有する店舗、建物あるいはそのバックグラウンドとなる商店街の成り立ちに大きく左右されるものであるということである。したがって、ここでは、SUSと建物の関係性を明らかにすることを課題として、仙台市における調査（調査No.6および7）結果から、建物の竣工年代・一階業種・土地および建物の所有関係と、SUSの規模および空間構成との関係を分析する。

竣工年代の新しいものほど建物規模は拡大の傾向にあるが、それに対応する形でSUS規模も拡大している。特に、昭和50年以降では、SUS規模の伸びは建物規模の拡大とは独立の傾向として特筆すべきものである。貴重な一階床面積を削ってまでSUSを設ける理由とは何か。ここに、単なる商業空間から都市的オープンスペースへと脱皮しつつあるSUSの姿がみられる（図-12）。

図-12 竣工年度別 SUS および延床面積の推移

しかもこのSUS規模の拡大傾向は、奥行き/間口の上昇からも明らかのように、時代の経過とともに奥行きが増加する傾向へとつながっており、結果的に開放度の高い街路を形成することとなる。またそれは、図-13および図-14で示されるように、昭和55年以降建設されることの多くなったサービス業や業種の複合化した建物（異なる業種の複数の店舗でSUSを所有するタイプ）の増加と関連していると考えられる。

一階業種別のSUS面積の構成を街路別にとらえる

図-13 竣工年度別1階業種

図-14 1階業種別 SUS 規模分布

図-15 SUS 面積からみた1階業種

と、個々のSUS面積は小さいものの各街路とも小売業店舗の有するSUS面積の合計が、一番町四丁目を除いて全体の50%以上になっている。図-11で示したSUS開放度の低いサンモール・一番街・名掛丁では、一階業種は小売業が中心であり、かつ複合ビルの少ないことがその要因となっていると考えられる。特に名掛丁では娯楽業の比率が高くなっているが、間口が大きいものの奥行きの小さい横長型のSUSが多く、そのことが開放度を低く抑える結果となっている（図-15）。

土地の所有形態は、図-16に示すように5つに分類されるが、建物所有者がそのまま土地を所有している

持地	単独所有	(223)	①
	共有	(53)	②
借地	地元地主	(22)	③
	県内地主	(5)	④
	中央業者	(3)	⑤

図-16 土地所有形態の類型化（カッコ内は例数）

ケース（単独所有）が約3/4を占めている。SUS開放度の小さいサンモール・一番街では「共有」を含めて持地が他の街路に比べて低い割合となっており、借地利用の建物故に、一階の床面積を削ってまで空間を外部化することの困難性を浮き彫りにする形となっている（図一17）。

図一17 街路別土地所有形態

一方、建物所有形態は、図一18に示すように9つのケースが存在しているが、街路別にみると、やはりここでもSUS規模が小さく開放度の低いサンモールにおいて、他の街路とは異なった様相を示しており、テナントビルおよび借家店舗の比率が約半数に達しているのが特徴的である。同様に開放度の小さい名掛丁では、空間を比較的自由に計画しやすいと考えられる単一店舗による単独所有の比率が小さく、またポケット型SUSの多い一番街における縦割型の比率の高さも特徴的である（図一19）。

図一18 建物所有形態の類型化（カッコ内は例数）

図一19 街路別建物所有形態

建物所有形態がSUSの形態にどのような影響を及ぼすかを、平均奥行きおよび間口によって分析する。

大型店舗の場合は、建物規模が大きいこともありSUSの間口は大きく、また複数個設置される例が多く

図一20 建物所有形態とSUSの空間形態

なるものの、奥行きは小さく、間口の広さのみが強調されることとなり、街路の開放度に大きく寄与しているとは言えない。一方、複数の小規模店舗が並列して一つの建物を形成する形態（縦割型）では、個々には間口の小さいSUSであるが、共有されたSUSと見なすことにより間口は大きくなるものの、横割型を含めてこのような小規模区分所有形式の建物の場合、SUS奥行きの増大は極めて制約されている（図一20）。

次に、建物の所有形態とSUSが媒介として存在する店舗前面の空間状況との関係を分析する。

まず、SUS内および道路境界部のファニチュアの設置状況であるが、セールスワゴンやハンガーなどの商業的設置物を商業系ファニチュア、看板や案内板などを情報系ファニチュア、ベンチ・電話等を公共系ファニチュアと定義し、各ファニチュアの設置数をもとに分析した。設置数が10を超えるものを「多数」と表現し、建物所有形態との関係を示したものが図一21である。なお、公共系ファニチュアの設置はごく少数のSUSでしか見られず、また建物所有形態のうち「等価交換」と「共有」とは例数が少ないため、分析からはずしてある。

図一21 建物所有形態別ファニチュア設置状況

商業系ファニチュアの場合は、比較的SUS奥行きの大きいテナントビルやテナント支配型の建物で少なく、看板等の情報系ファニチュアが多くみられることとなる。接地性の強い単一所有および縦割型では、商業系の設置数が多くなり、SUSが商業利用の空間と考えられ

開放型	カウンター	シースルー	ディスプレイ
<p>SUSと店舗とが仕切りなしに接続する</p>	<p>SUSとの境界部に、カウンターが存在する</p>	<p>SUSとの境界が透明なガラスで構成される</p>	<p>ディスプレイがSUSと店舗との境界を形成する</p>
不透明ガラス	壁面主体	入口なし	
<p>SUSとの境界がスモークガラスや格子で遮断される</p>	<p>SUSとの境界部は入口を除いて壁で遮られる</p>	<p>店舗への入口の無いウロズ型のSUSが存在する</p>	<p>— 壁面</p> <p>--- ガラス</p> <p>--- スモークガラス</p> <p>□ カウンター</p>

図-22 ファサード形態の類型化

ている状況がわかる。

次に、ファサードの形態については、SUSと店舗内との境界の形成のされ方をもとに図-22に示すような類型化を行い、建物所有形態との関係进行分析した。

大型店舗では、単にセットバックしただけのクローズ型SUS(図-9参照)が相当数含まれているため、「入口なし」が過半数を超えており、また縦割型では、店舗部分と街路とが境界を持たずに接する「開放型」が非常に高い比率となっている。所有関係が単純な単一店舗において開放度の比較的低いファサードになっている状況は、SUSの奥行きが、小規模区分所有タイプに比して大きくなっている状況と併せて考えれば、SUSの開放度と店舗のファサード形状からとらえた開放度が必ずしも一致していない状況を示しているものと考えられる(図-23)。

図-24は、D/W(奥行き/間口)の平均値により分

図-23 建物所有形態別ファサード形態

図-24 ファサード形態・透過性別 D/W

析したものであり、特にここでは、ファサードの透過性(透明部分の面積比率)を併せて示している。カウンターの接近したファサードタイプではD/Wが大きく、また透過性が100%のファサードでD/Wが小さいという事実は、私的領域を確保した上での境界部分の外部化によって、二段階の境界(道路とSUS、SUSと店舗)が形成される形で、D/Wの大きい開放的なSUSが形成されている状況を示すものと言えよう。

7. まとめ

本報は、都市の中心的街路において、私的建物敷地内に貫入する都市的オープンスペース、すなわちSUSを研究対象として、その意味・役割を解明していく上で、第一段階として空間形態によるSUSの類型化を行い、土地および建物の所有形態、業種、竣工年代等のSUS成立の背景との関係性について分析をしたものである。以下にその結果をまとめる。

- (1) 仙台市中心部の6商店街における調査結果から、建物の更新の著しい街路においては、平均SUS規模は大きくなると同時に、[奥行き/間口]も大きく、縦長型のSUSが多く含まれてくることがわかった。[奥行き/間口]は、街路によってその分布および平均値は異なっており、街路の空間特性を示す有効な指標となっている。
- (2) SUS規模およびSUS内の空間利用のされ方、SUSに面する建物内の店舗構成から、SUSを8タイプに類型化した。全体的な分布傾向としては、小規模ポケット型がその大半を占めており、街路間に大きな違いはみられないが、[SUS面積/街路長さ]をタイプ別の累積で分析すると、SUSの街路別開放度とも言うべき特性が明らかとなり、街路のプロフィールを示す有効な分析指標となるものと考えられる。
- (3) SUSの空間形態からとらえた街路特性の違いに大きく関与していると考えられる要素として、土地および建物の所有形態、またそれと関連して一階店舗の業種があげられ、それはSUS規模だけではなく、ファニチュアの設置状況やファサード形態とも関係が深いことが明らかとなった。それは、SUSの内外で展開される人々の行為を大きく左右し、それにより生じてくる遊び・賑わいなどの様相の差となって現れてくるものと考えられる。次報では、行動観察マップの分析から、SPu・SPr化の実態を明らかにし、SUS領域の形成を詳細に解明していく。

なお本報告は、小室宏二氏(現いわき市)、山室真氏(現フジタ工業)、佐藤武志氏(現三菱地所)、鳥居立弥氏(現NKK)、広瀬浩二君(大学院生)をはじめとする研究室の多くのスタッフによる共同研究の一部であり、深く感謝の意を表するものである。

注

- 1) W. N. Seymour, Jr. 編：SMALL URBAN SPACES, 彰国社, 1969
- 2) W. H. Whyte : The Social Life of Small Urban Spaces, Conservation Foundation, 1980
- 3) Jan Gehl : Life Between Buildings -Using Public Space-, VAN NOSTRAND REINHOLD COMPANY, 1980
- 4) 近江 隆, 北原啓司ほか：既成市街地における SP 領域の形成に関する研究：日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 225~228, 1988 年 10 月
- 5) 船越 徹, 積田 洋：街路空間における空間意識の分析（心理量分析）—街路空間の研究（その 1）—；日本建築学会論文報告集, 第 327 号, pp. 100~107, 1983 年 5 月
船越 徹, 積田 洋：街路空間における空間意識の分析（物理量分析）—街路空間の研究（その 2）—；日本建築学会論文報告集, 第 364 号, pp. 102~111, 1986 年 6 月
船越 徹, 積田 洋：街路空間における空間意識と空間構成要素との相関関係の分析（相関分析）—街路空間の研究（その 3）—日本建築学会論文報告集, 第 378 号, pp. 49~57, 1987 年 8 月
- 6) 小嶋勝衛ほか：繁華地区の空間構成に関する研究その 1~12；日本建築学会大会学術講演梗概集, 1973, 74, 75, 76, 79 年
小嶋勝衛ほか：都心副都心繁華地区の街路の空間構成に関する研究（その 1~2）；日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1901~1904, 1982 年 10 月
- 7) 奥 俊信：瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析—街路景観の視覚特性ならびに心理的效果に関する実験的研究 第 1 報；日本建築学会論文報告集, 第 321 号, pp. 117~124, 1982 年 11 月
奥 俊信：街路景観構成要素の景観評価への影響について—街路景観の視覚特性ならびに心理的效果に関する実験的研究 第 2 報—；日本建築学会論文報告集, 第 351 号, pp. 27~37, 1985 年 5 月
奥 俊信：街路景観構成要素と心理的效果との関係—街路景観の視覚特性ならびに心理的效果に関する実験的研究 第 3 報—；日本建築学会論文報告集, 第 389 号, pp. 108~115, 1988 年 7 月
- 8) 宮本文人, 谷口汎邦ほか：大学キャンパスにおいて 2 棟の建物が構成する外部空間の物的属性について—大学キャンパスにおける建築外部空間の構成計画に関する研究 その 3—；日本建築学会論文報告集, 第 364 号, pp. 112~122, 1986 年 6 月
谷口汎邦, 宮本文人：大学キャンパスにおいて建築群が構成する囲み空間の物的属性について—大学キャンパスにおける建築外部空間の構成計画に関する研究 その 4—；日本建築学会論文報告集, 第 381 号, pp. 63~74, 1987 年 11 月
- 9) 志水英樹, 谷口汎邦ほか：大都市において銀行建築が構成する街並の物的属性について—街並の知覚構造に関する研究—；日本建築学会論文報告集, 第 375 号, pp. 64~75, 1987 年 5 月
- 10) 八木澄夫, 乾 正雄：視空間の容量知覚とその簡略模型実験の有効性—建築構成面のつくる視空間の容量知覚に関する研究・1—；日本建築学会論文報告集, 第 368 号, pp. 62~68, 1986 年 10 月
八木澄夫, 乾 正雄：空間を構成する面の視覚的效果—建築構成面のつくる視空間の容量知覚に関する研究・2—；日本建築学会論文報告集, 第 373 号, pp. 29~36, 1987 年 3 月
八木澄夫, 乾 正雄：視空間の枠組がつくる視覚的容量の知覚—建築構成面のつくる視空間の容量知覚に関する研究・3—；日本建築学会論文報告集, 第 380 号, pp. 24~31, 1987 年 10 月
- 11) C. Alexander : パタン・ランゲージ, 鹿島出版会, 1984
- 12) 注 3) に同じ
- 13) 土肥博至ほか：外部空間の構成に関する研究（1）—広場空間における滞留行動の実態—；日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1695~1696, 1978 年 9 月
- 14) 沖塩莊一郎ほか：公開空地等の実態に関する研究—その 1, 滞留と通り抜け利用—；日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 2107~2108, 1983 年 10 月
- 15) 鈴木成文, 小林秀樹：集合住宅における共有領域の研究に関する研究；日本建築学会論文報告集, 第 319 号, pp. 121~131, 1982 年 9 月
- 16) 中間領域に関する研究委員会：中間領域研究；住宅・都市整備公団, (財) 日本住宅センター, 1987 年 12 月
- 17) 上原孝雄ほか：ショッピングモールの魅力と空間構成要素；日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1671~1672, 1983 年 10 月
- 18) 青木英明：ショッピングモールの効果に関する調査—広島県呉市の場合—；日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 269~270, 1985 年 10 月

本論文に関連する既発表論文

- 1) 近江 隆, 北原啓司：「SUS-Small Urban Spaces」研究の課題と方法；日本建築学会東北支部研究報告集, 第 50 号, pp. 25~28, 1987 年 11 月
- 2) 近江 隆, 北原啓司：「SUS 空間の SP 化と SUS 効果の実態」；日本建築学会東北支部研究報告集, 第 50 号, pp. 29~32, 1987 年 11 月
- 3) 近江 隆, 北原啓司, 小室宏二, 佐藤武志：「SUS 空間の形態類型と街路評価」；日本建築学会東北支部研究報告集, 第 51 号, pp. 149~152, 1988 年 6 月
- 4) 近江 隆, 北原啓司, 小室宏二, 佐藤武志：「SUS 領域形成の要因」；日本建築学会東北支部研究報告集, 第 51 号, pp. 153~156, 1988 年 6 月
- 5) 近江 隆, 北原啓司, 広瀬浩二, 鳥居立弥：「SUS の成立に及ぼす建物・街路の影響」；日本建築学会東北支部研究報告集, 第 53 号, pp. 71~74, 1990 年 6 月
- 6) 日本建築学会大会学術講演梗概集において 1988, 1989, 1990 年に, すでに 6 編の報告をしており, 参照されたい。

(1990 年 8 月 3 日原稿受理, 1991 年 3 月 18 日採用決定)